



大山シアノさん

仕事：日本語学校勤務 柳沢在住

昨年10月から、日本語学校で教材開発と講師としての研修を始めたばかりの大山さん。25歳で学生結婚をし、今は二人の子どもの母親である。

大学院で日本語言語学を修めた後は、自宅で実家の経理や、語学教材の翻訳などをしていたが、外で働くのは今回が初めてである。「私にはキャリアがないし、子育て中だし：当分は専業主婦でいるしかないな」と思っていた。

ところが2004年の公民館の「子育て講座」に参加したことが大きな転機となった。「講座には保育がついていて、初めてわが子を他人に預ける体験をしました。そして、子育ては自分ひとりで頑張ればいいのでなく、助けってもらってこそ親子が成長できる、ということを実感したのです」

また、講師や受講生の女性が、子育てしながら社会参加している姿を見て、「環境さえ整えば、私にも自分の求める生き方ができるのではないか」と感

じ、行動をおこした。

「幸い保育園に申し込むことができ、それからは「まず、下の子を保育園に送り、家にいったん戻り、上の子を小学校へと送り出します。夫は早朝に出勤するため、これだけは毎朝、私の責任でこなしています」

大変ではあっても、仕事を終えて帰宅した夫が、洗濯物を黙々とたたんでいてくれたり、子ども達が「お母さん、ぼくが手伝ってあげる」と頼もしいことを言ってくれたりすると、家族で家事を分担し、お互いを支え合っていることを実感している。

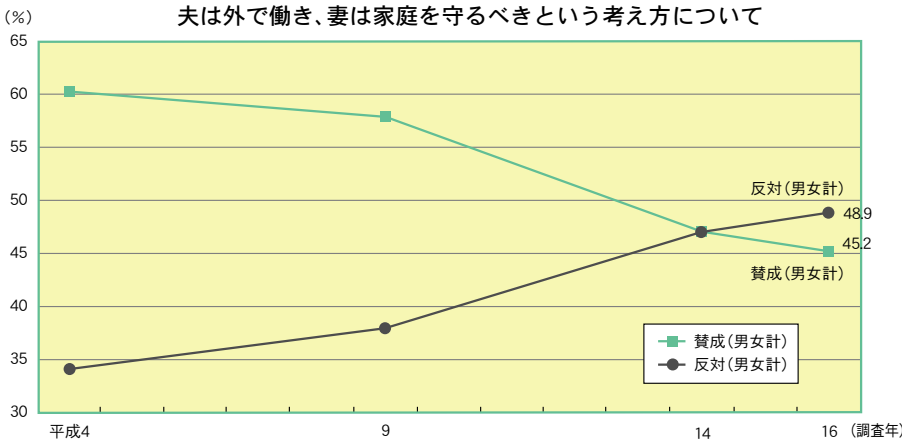
誰かの役に立つ生き方

職場を得るまでの努力は大変なものだった。まず会社めぐりを100件こなす覚悟で履歴書を片手に直接アタックしたが、様々な理由で断られ続け、ついに、立ち止まり内心をみつめ直し「長く学んできた日本語言語学を活かす仕事を探すべきだった」と気づいた。

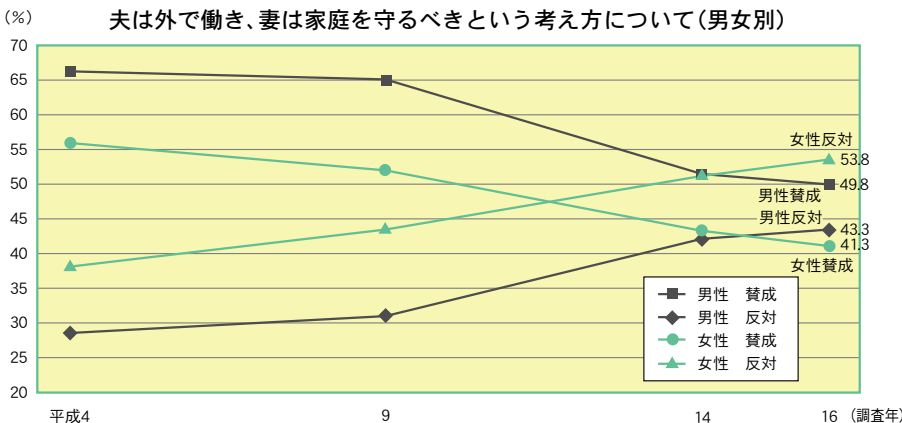
「インターネット上の学校案内で最も心に響いた教育方針の学校が、現在の職場です。生徒達は留学生ビザで来日し、働きながらまじめに日本語を学んでいます。その生徒たちに日本語を教えることに応えていく日本語教師の仕事にやりがいを感じています」

「職場では、誠実に自分のことができることを精一杯こなしています。また、自分を支えてくれる保育士さん、家族に『ありがとう』の感謝の気持ちを忘れないでいます。私たち夫婦は、『誰かの役に立つ生き方をしようね』と話しあっています。子どもたちにもこの生き方、働き方を伝えたいと思います。今できることは限られていますが、5年後10年後を見据えて、一歩一歩進んでいきます」

夫は外で働き、妻は家庭を守るべきという考え方について



夫は外で働き、妻は家庭を守るべきという考え方について(男女別)



(備 考) 1. 内閣府「男女共同参画に関する世論調査」より作成。
2. 「賛成」、「反対」の他に「わからない」との回答があるため、合計しても100%にならない。
資料出所：内閣府(平成17年版男女共同参画白書より)



いです」という大山さんの目は輝いて